

平成 30 年 6 月 4 日現在

機関番号：22701

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2015～2017

課題番号：15K02083

研究課題名(和文) 夢想・秘説にみる中世王権の叙述と場所性：仏教的世界観における天皇像の構築と解体

研究課題名(英文) On the Narration and Placeness of Medieval Royal Authority as seen in Dreams and Secret Instructions: The Construction and Deconstruction of Tenno in Buddhist Worldviews

研究代表者

松本 郁代 (MATSUMOTO, Ikuyo)

横浜市立大学・都市社会文化研究科・准教授

研究者番号：60449535

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,800,000円

研究成果の概要(和文)：本研究では、天皇の即位灌頂に関する秘説や夢想に記述された、「天皇」や「神仏」の存在意義やその記述形式にみる中世の文化体系について分析した。記述に表わされた「天皇」や「神仏」は、灌頂儀礼をつうじた文化の相伝系譜に独占的な権力や権威を構築し、神話や密教に基づく世界観や場所性に関わる記述形式をもちながら、文化を相伝する系譜の起源や由来の正統性を表現する主体者として機能していた点を明らかにした。

中世文化の根幹には、秘説をつうじた文化相伝にみられるように、古典や血統を重んじる権威主義、秘密主義的な思想と、交換や贈与を容易にする現物・現実主義的な物質文化的な態度とが併存していたと結論づけた。

研究成果の概要(英文)：In this research, I focused on analyzing formal accounts of the accession ritual (abhisheka) as seen in secret instructions and dreams about the ritual. That "tenno" and "gods and Buddhas" are included in such secret instructions and dream accounts is significant because it demonstrates that the cultural inheritance conveyed through the abhisheka ritual constituted a monopolistic type of power and authority. At the same time, I revealed that, as a foundation for showing the origins and legitimacy of the genealogy and inheritance, secret instructions and dream accounts involve the "placeness" of mythical and esoteric worldviews. I conclude that at the backbone of medieval culture we find the coexistence of two perspectives: an authoritarianism and ideology of secretiveness that emphasized the classics and pedigree, as seen in the handing down of secret instructions; and a realistic attitude towards material culture that facilitated exchange and gift giving.

研究分野：日本文化史

キーワード：秘説 相伝 天皇 場所性 仏教的世界観

1. 研究開始当初の背景

中世日本の神仏関係を概念化するタームに、神仏関係の実態や現象を捉えた「神仏習合」や「本地垂迹説」、記紀神話や祭文を密教や中国思想によって解釈した「中世日本紀」や「中世神道」などがある。これらに関する研究は、明治時代初頭に新政府が出したいわゆる神仏分離令や近代合理主義的な思想の摂取により、荒唐無稽な言説として退けられ、1980年代後半から1990年代まで正当な評価を受けずにきた分野でもある。今でこそ、中世日本の宗教思想や文化体系にそくした解釈や評価が下されているが、それでも言説的には不可解な点も多く、中世の思想体系として捉え難いのも否めない。また、近年では、海外の日本研究者が欧米のディシプリンによって資料を解釈し、中世日本の宗教思想を積極的に特徴づけている点に関してはもはや無視できない状況にある。

申請者は、長らく中世の神仏関係とそれに関わる言説や儀礼、そして中世王権の問題に取り組んでおり、これらを文化体系的に捉えられないか考察を進めていた。特に、海外の研究者との共同研究を遂行するなかで気づいたのは、ある実態から理念や思想を体系化し普遍化し、その時代的な特徴を明確に捉えているが、何故そのような実態が生まれたのかという歴史的背景や、中世の文化・思想を構造的に捉えた側面からの考察が欠落していることが多い点である。

「中世的」という表現によって歴史的特性を強調する要素は必要とされても、その実態を作り出した歴史的背景や構造についての考察は、分野の違いや歴史観の違いもあり、共通認識を得ることは、一筋縄ではいかないことがわかった。

このような研究開始当初の背景を踏まえ、冒頭に挙げた中世日本の神仏関係に関するタームを秘説や夢想といった言説形式に捉え、思想史や文化史の視点からの考察を試みることにした。

2. 研究の目的

中世日本に生成された神仏関係の言説には、「天皇」や「王権」に関わる秘説や秘伝が多く含まれ、また言説が生成される契機には、儀礼や夢想に関わる場合が多い。よって本研究では、言説のなかに登場する「天皇」（あるいは「天皇像」）を分析の中心に据え、どのような「天皇」をどのように「叙述」しているのかに着目し、中世における神仏関係と王権との関連性を文化・思想的に体系づけることを目的とするものである。

本研究のテーマを「中世日本における夢想・秘説にみる中世王権の叙述と場所性：仏教的世界観における天皇像の構築と解体」とし長々しいが、ここに神仏関係から派生した「中世王権の叙述」、「場所性」、「仏

教的世界観」、「天皇像の構築と解体」の問題点と相互関係を提示し、中世日本における文化・思想の問題として体系化することを試みた。

このうち「場所性」の概念については説明を補足する必要がある。「場所性」とは、カナダの地理学者であるエドワード・レルフが *Place and Placelessness* (1973) のなかで(翻訳は『場所の現象学—没場所性を越えて』筑摩書房、1999)提唱された「人間主義地理学」に基づく地理概念の一つである。それまでの計量主義的、形式主義的な地理学を批判し、人間の経験から場所の本質を捉えようとするものである。人間の景観や場所に対する姿勢や直接の経験のあり方が、人間の場所に対するアイデンティティーを示すのだとする。この概念は、人の場所や環境との関わり(「場所性」)を無視した「偽物性/キッチュ/テクニク/都市計画」などの場所を意味する「没場所性」と一対に捉えられており、人の環境に対する関わり方が、場所のセンスや場所づくりを決定付けているとするものである。

「場所性」の問題は地理学の場所論に関連するものであり、人の感性や経験が場所性を作り出すという視点は、感性や心性を重視するフランスのアナール学派の文化史研究とも共通している。そのため、本研究では中世日本の秘説や夢想に「場所性」の概念を応用できないか、考察を試みた。

この研究で分析対象とする秘説や夢想に関する言説には、「天皇」の姿を仏教界の須弥山や密教の仏などにとらえ、仏教的世界観に位置づける、という特徴が多くみられる。この仏教的世界観を中世的な「場所性」の問題として捉え、当時の人々が抱いた「天皇」の姿や像に対する目的を浮き彫りにしたいと考えた。場所を一つの現象として捉える「場所性」の概念は、実際の場所を対象とするが、前近代は実際の地理や地図の表面以外の場所、つまり夢想や秘説のなかに登場する、理念化された概念としての「場所」があると考えられる。

よって、本研究では、そのような理念化された場所に登場し、存在するものとされた「天皇」を捉え、それがどのような像であったのか考察を行った。

本研究の分析を通じて、前近代における「天皇」がいかなる点で「虚構」とされてきたのか、近代になって消失した価値観や理念をその時代の文脈に捉え直し、新たな文化・思想体系を構築しながら、それまでの時系列的に編年される文化史を批判的に検討することを目的とした。

3. 研究の方法

本研究は、中世日本の秘説や夢想に関する言説を中心に扱うが、目的でも示したとおり、神仏関係から派生した問題点として「中世

王権の叙述」、「場所性」、「仏教的世界観」、「天皇像の構築と解体」を挙げ、これらの分析を通じて中世日本における文化・思想の問題に捉え、体系化することを試みるものである。これらに関する内容の多くは現在にはない歴史的な概念や理念を前提にする。そのため、言説と理念に対しては以下の方法・視点を用いて分析を行った。

1) 資料に記された言説の読み方

本研究で踏まえるべき中世における神仏関連の言説は、作者や担い手などの組織が不明なものが多い。誰が書いたのか明確なものであっても、それが書いた人物によるオリジナリティーなのか、何かの影響を踏まえ記述されたのかによっても、内容の意味が違ってくる。また、言説の記述者の主体となる人物や組織が明らかな場合であっても、テキスト間の書写や貸借関係からも記述内容に影響を与えることから、記述者個人の体験でのみテキストを理解することはできない。

よって、秘説として記述された資料については、そのエクリチュール読み取ることにより、秘説として記述形式を捉えた。一方、夢想などの個人の体験が記されたものに関しては、後に編集され直して記述されたものも多いが、まずはナラティブとして記述された夢想を読み解き、夢想を経験した個人の姿をとらえた上で、記述化された夢想としてのエクリチュールを読み取り、分析の対象とした。

2) 天皇と中世王権に関する分析

本研究で捉える天皇は、記述された秘説や夢想に登場する「天皇」である。そのため本質的には、これらは叙述された「天皇」であり、記述によって理念化された存在である。また、理念化された天皇は、天皇の歴史的实际と必ずしも一致するものではないとする理解も可能である。しかし、理念化された「天皇」と歴史的实际の天皇を単純に比較したり、重ね合わせその違いを指摘したりしても、天皇と中世王権の本質に関わる分析は成立しないと考える。

むしろ本研究で提示したのは、中世における天皇の存在とは、実体と乖離した理念を体現化した存在として期待されたのか、天皇に対する理念的思想が前提としてあり、その理念を天皇が目指した結果、天皇の実体があるのか、なぜ天皇に対する理念が必要とされたのかなどの視点を立てることにより、天皇の本質を捉えようとした。しかし、これらの点に関しては、その前提となる秘説や夢想に関する研究課題を解かなくてはならず、今回の研究のなかで結論を出すには至っていない。

「王権」の基本概念の一つにとらえられているものに、世界地域の王の儀礼から文化圏としての王権を分析したA.M **ホカート**(1883-1939)の『王権』*Kingship* (1927)がある。本研究では、この概念を参考にしつつ、日本史や日本文学分野で用いられる「中世王

権」の概念について、独自に考察する必要があると思われる。

中世日本では「王権」がはじめから儀礼行為によって確立されているのではなく、政治の変動や宗教的動向に影響されながら、理念的・観念的に形成されていく側面がある。そして、それが既存の儀礼や作法に影響していく。よって、本研究では、「王権」身分の範囲や対象を限定した考察にとどまらず、天皇の「王権」とはどのようなものであるのか、改めて考察の対象とした。

3) 仏教的世界観に関する理解

本研究では、中世の人々が信仰として抱いた仏教的な時空間認識ではなく、教義のなかに説かれた仏教的な世界観や宇宙観から解釈を進めた。平安時代以降の人々が日常生活(現世)のなかで抱いた、たとえば極楽・地獄思想、正像末思想は、人々による仏教信仰との相互の影響関係によって形成されたものである。それに対し、経巻などの聖教に記述された世界観は、世界の原則を提示したものである。

本研究で考察対象とする夢想や秘説は人々の理想や願望を具現化しているが、その正統性を仏教的世界観に求める記述が多い。またその記述のあり方は、理想や願望という心性であるために、現世的な解釈ではなく、理想的で原則的な世界観に即した記述が多い。よって本研究では、聖教に説明された須弥山世界、華嚴蔵世界、両界曼荼羅を基本とする毘盧舎那如来・大日如来の原則的な所在を中心にとらえた。そして、人の心性を介して、これらの記述がどのように聖教から逸脱したり、別の文脈へ連続したり再構築されたりするのかを中心に考察を進めていく。

4) 近代化に関する問題

秘説や夢想に関する「近代化」の問題は、本研究でとらえている対象の評価に大きく影響している。仏教的世界観の近代化をめぐる動向として、実存や実在を問う西洋科学の流入を背景とした梵曆運動など須弥山世界に対する評価の変遷がある。

近代を経て多様な価値の影響を既存の世界観が受け、そこに新たな価値が登場する。しかし、そのなかには民俗的な習慣を非科学的なものとして否定する動向があり、前近代における文化・宗教研究に対して同様の傾向が生まれる。

科学と非科学的なものの区別を人が生活するなかで形成した思想や理念の範囲にまで適応させるのは、それまでの人間の文化を否定することである。そうではなく、その時代独自に適用された意味をとらえるべきであろう。

よって、本研究でとらえる夢想や秘説などがみられる中世の独自の価値観は、その時代の枠組みのなかで認識する実態と、その実態を近代化へ向かう過程や文脈にとらえた場

合とでは、異なる次元の問題として考えている。

4. 研究成果

本研究では、天皇が即位式で修した「即位灌頂」を中心とする中世の秘説やその相伝形態、夢想を含む即位灌頂や即位に関する記述や叙述形式から、その神仏体系の解明と場所性に関する以下の3項目についての考察を試み、秘説における天皇の位相をとらえた。

1) 神仏の登場と秘説のエクリチュール

即位灌頂をはじめ琵琶灌頂や和歌灌頂など、「灌頂」によって相伝や伝授を行った秘説を中心に分析を行った。秘説に記述された内容の典拠として口伝や夢想が挙げられる。これらは個と個の関係性によって完結すると考えられがちであるが、夢想が社会的なネットワークのなかで共有されたように、口伝も同様の性質を持ち、両者はともに秘説の重要な構成要素として考えられる。このような性質をもつ夢想や秘説の記述形式から、神仏を語るエクリチュールを導き、そこに神仏がなぜ記述されたのか、その役割について考察した。

記述された神仏や天皇が登場する秘説のエクリチュールは、密教による解釈によって構成されており、文化の相伝や継承の位相を神話や仏教という理念的な世界に位置づけるものとして機能していたといえる。また、このエクリチュールには、神仏を前提とする文化相伝に関する権力や権威、神話や須弥山世界など、世界観を構成する原理的な理念が示されている一方で、神仏と社会とを結ぶ具体的な場所、たとえば特定の寺社名が提示されていた。秘説にみえるこれらの特徴から、これを拠り処とする権威や権力の構築と、その根拠や現場となる場所性との関わりを明確にした。

また、秘説に登場する多くの神仏は特定の寺社の本尊やそれに関わるものではなく、記述された秘説によって作り出されている場合が多く、その性質についても考察を行った。音楽や和歌など技芸の秘説に記述された神仏は、その技芸の起源や相伝に関わり、その技芸を守護する役割をになっている。その性質は、起源や相伝を記述した秘説のなかで、その存在意義が完結するもの、社会的な文脈と結びつき、何らかの権力や権威と関連付けられた性質をもつ神仏とに分類できる。前者は、たとえば和歌の詞から創出された神仏や、藝の神としての神仏が信仰の場所と結びつき、特殊な呼称や習合を獲得するものである。後者は、国家的な儀礼や祭祀の対象として公的な性質を有す神仏であり、都における地方や本寺における末寺や末社などの関係によって構築されている。

もう一つ神仏の性質として考えられるのは、藝の「宿神」としての性質である。「宿神」には様々な意味があるが、藝や技芸の秘

説に登場する神仏は藝の守護神としての意味を有しており、宿神との関連性について考察を深める必要がある。特に口伝や解釈の記述から新たに生み出される神仏は、その限りにおいては社会的外部に公開されるものではない。しかし、これらが秘説として特定の流派や法流に相伝されることで、これらの神仏自体が独自の意味を構築していくと考えられる。今後、思想史研究の分野で深めるべき課題である。

2) 相伝形態にみる中世的権威主義の成立

本研究では、研究対象となる秘説が、なぜ「秘説」という形式でなくてはならなかったのか、という点についても考察した。前項で、秘説のエクリチュールには、神仏を前提とする文化相伝に関する権力や権威や、世界観を構成する原理的な理念があり、また、神仏世界と社会とを結ぶ現場としての具体的な寺社が提示されている点を示した。なぜこれらが「秘説」という思想的な記述形式であるのか、それは中世的な権威や権力の表現形式にも関係する。

中世における権威や権力の様態は、必ずしも政治に還元されるものばかりではない。唐物に対する珍奇性を重んじる傾向、古今伝授のように地方で都の文化を伝授する行為や、贈与や返礼行為の隆盛にみられるように、渡来品の所有や贈与、古典に関する教養の相伝なども権威的な意味をもち、権力を表象した。しかし、時代に新たに登場した渡来品や贈答品など品や物としての価値と、秘説など古典に依拠した旧来の知識や教養にもとづく文化相伝の価値は、権力や権威を構築する要素であっても、必ずしも等価値とされたわけではなかった。両者の差を明確化するものとして、「貨幣」と等価値の交換・贈与が可能となるか、ならないかという点である。これは、品物代や相伝代として「貨幣」を支払う交換行為とは別問題である。流派など特定の系譜に相伝される場合、形態や状態が視覚的に判断できないため「市場」での公平性はみえづらく、その価値を「貨幣」に換算することはできても、言い値に近くその範囲内で絶対的なものとなる。

古典に依拠する藝の秘説が深化していく背景には、さまざまな流派の説が統合され、多くの解釈が錯綜しながら、知識として形成された部分もある。その上で、権威や権力を測る価値の尺度に、物の交換手段である「貨幣」が存在したことは、逆に、市場相対的な数字や物と物とが代物関係にならないものの存在を明確化しているといえる。これは、相伝系譜内で完結するような、独占的で絶対的な文化の市場を形成するとともに、秘説としては、物質的な価値と対極的な位相にある複雑な理念を生んだといえる。

商品として値が付けられた唐物が、座敷飾りや唐物管理、掘り出しの文化を生み出したように、徹底した現物主義、現実主義を社会

的に表象していたのに対し、古典に依拠した文化は、秘説の相伝や灌頂儀礼にみられる秘密主義や権威主義がその独占的意義を表象していたといえる。

中世に登場した新たな中世的権威主義とは、このような性質を有す文化によって構成されていたのではないかという点を導いた。以上の論点に関しては、論文で発表する予定である。

3) 須弥山世界にみる中世的場所性の問題

秘説や夢想の多くは、その内容に関わる場所や空間が登場する。具体的で現実的な場所もあれば、理念的なものもある。ただし、これらの場所は、秘説や夢想という記述形式のなかに登場するため、それら自体が秘説や夢想に何らかの意義を伝達する役割をになっているといえる。

地理学の概念で用いられている「場所性」とは、場所を現象としてとらえるものである。人間がその場所で直接経験したことをつうじて、その場所に対するアイデンティティを見いだすというものである。

本研究では、秘説や夢想の記述者や体験者の社会的ネットワークによって見いだされた「場所性」について考察を行った。かかる記述に表わされている場所とは、実在する寺社名や地名もあれば、須弥山世界や蓮華蔵世界、両界曼荼羅など理念として説明される場所もある。これら現実と理念的な場所を記述する行為（経験・体験）こそ、中世思想的な「場所性」を生み出す営為であったと考えられる。よって、本研究では、これらを中世的な「場所性」として概念的に捉えた。そして、両者を実在／非実在のものとして場所の位相的な違いを区別することは、却って本質を見誤ると判断した。

秘説や夢想などの記述形式のなかに登場する場所とは、その記述内容を根拠付けたり、起源や由来を語ったりするためのものが多い。この点は、説話・縁起や神話とも共通する性質をもつ。

しかし、第1項で説明したように、エクリチュールとしての秘説が、神仏を前提とする文化相伝に関する権力や権威を背景に成立していることから、その場所性は、その記述のなかで完結するような「場所」としてではなく、秘説をよりどころとする権力や権威と構造的に関わりながら登場したと考えられる。

中世文化は、前項で指摘した唐物の社会的展開にみるように、現物・現実主義的な態度によって支えられていた一方で、独占的で絶対的な秘密主義や権威主義に基づく認識によって構築されていた側面がある。しかし、技術の相伝や伝達が、古典原理的な理念的世界を相反的に排除したわけではない。

渡来品である「唐物」は、国内に思想的根拠を持たない物質文化でもあり、当初は渡来品として受け入れられ、座敷飾りの道具とし

て作法を生み出したものである。

和歌や琵琶などに関する古典的知識や仏教的世界観による秘説は、唐物文化が流通した頃にはすでに確立しており、これらの相伝が独占的に構築されていった点と全く異なる。詠むことや弾くことなどの技術を相伝することと、唐物という物を飾る技術を相伝することは、同じ技術相伝として考えられるが、起源や由来に関しては、それぞれ異なる文化的位相におかれていたといえる。

今後の課題としては、中世文化の起源や由来に関する思想的分析をつうじて、社会的権威や権力のあり方、現実・現場的な文化体系との関係性、記述された神仏や天皇と王権との相互性について考察を深める必要がある。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[学会発表] (計8件)

Ikuyo MATSUMOTO, Buddhism and Political Power in Mediaeval Japan: The Rituals of Consecration of the Emperor, the Centre of the Study Japanese Religions, co-sponsored by the Center of Buddhist Studies, SOAS University of London,

(2) 松本 郁代「参詣曼荼羅にみる中世清水寺の景観」(2016年8月24日, 於: 東北師範大学日本研究所, 中国長春)

(3) 松本 郁代「中世日本の即位儀礼にみる仏教的世界観: 「天皇」の支配理念と世界認識」(2016年8月23日 於: 東北師範大学日本研究所, 中国長春)

(4) 松本 郁代「即位儀礼の歴史: 即位式と大嘗祭」(2016年8月22日, 於: 東北師範大学日本研究所, 中国長春)

(5) 松本 郁代「中世日本の即位儀礼にみる仏教的世界観: 世界認識の中心と距離にみる天皇の空間と場所をめぐる」(「前近代日本における《世界》の想像」2016年3月18日, The Tadashi Yanai Initiative for Globalizing Japanese Humanities UCLA / Waseda University, 於カリフォルニア大学ロサンゼルス校, アメリカ)

(6) 松本 郁代「日本の古代・中世における社会規範の形成 忌と穢をめぐる觀念の制度化をめぐる」(2016年2月, 徳倫研究会(早稲田大学文学学術院・村松聡代表), 於早稲田大学)

(7) 松本 郁代「中世王権における仏教的
世界観の場所性」(2015年9月, 於: 南カリ
フォルニア大学日本宗教文化センター, アメ
リカ)

(8) 松本 郁代「華夷思想における皇帝と
仏教的世界観における天皇の比較研究: 王権
の存立と場所をめぐる議論として」(日本文
化ソフトパワー戦略研究プロジェクト
2015年6月20日, 於: 中国社会科学院日本
研究所日本文化研究室, 中国北京)

〔図書〕(計3件)

(1) 松本 郁代『天皇の即位儀礼と神仏』
吉川弘文館, 全294pp., 2017年7月

(2) 松本 郁代「和歌をめぐる図像 密教
化する秘説の視覚性」(錦仁編『日本人はな
ぜ、五七五七七の歌を愛してきたのか』笠間
書院, pp. 110-129, 2016年12月)

(3) 松本 郁代「夢想にみる持明院統と崇
光院流の皇統 中世北野社の場所性と皇位
継承」(荒木浩編『夢見る日本文化のパラダ
イム』法蔵館, pp.215-240, 2015年5月)

6. 研究組織

(1) 研究代表者

松本 郁代 (Ikuyo MATSUMOTO)

横浜市立大学・都市社会文化研究科・准教
授

研究者番号: 60449535